

2023年12月24日

「光を見つめて」

ヨハネによる福音書 1:1-14

竹島 敏牧師

「初めに言があった」と聖書は語り始めます。「言」とは神の御心・意志であり、神の意志によって人も含めたこの世界の全てが創造されたと聖書はいいます。そして「言は肉となって私たちの間に宿られた」とあるのは具体的にはイエスの誕生を表していますから、「初めに言があった」という表現もまた、イエスのことを指していたのだとわかります。つまり、天地創造の前から神の言であるイエスは神の意志として神と共におられた、というのです。そしてそのイエスの内には人を照らす命の光があるというのです。

あたり一帯が明るいところに一筋の光が差し込んできても、その光を見出すことはできません。私たちが自らの心の内に希望の光を見出したいと願うなら、自分の力で光り輝こうとすることをいったんやめて、静まる必要があります。大事なものは、偽ったり飾ったりせずに静まって「今ある自分」のまま神の前に立つことです。イエスをキリストと告白し洗礼を受ける時、光なる御子イエスに赦されて「このように隣人と自分自身を愛しなさい」という御心に立ち戻るのです。私たちは洗礼を受けて、神によって創られたとおりの「本来の自分」を取り戻す歩みへと導いていただきました。「光は闇の中に輝いている」のですから、私たちの内に暗闇を抱えたままであっても、それが無いもののようにふるまうのではなく、すでに赦しの中を導かれて歩んでいることに気づく必要があります。クリスマスから始まる1年を、御子イエスから発せられる命の光を見つめつつ、その導きに従って歩んでゆきたいものです。